

音波では左4時方向を中心に乳管の拡張を認めた。また拡張した乳管内には内部エコーを伴っており、DCISを疑う所見と考えられ、カテゴリー4とした。MRIでは左D領域を中心に淡く造影される小結節を区域性に認め、DCISが疑われた。乳汁のスタンプ細胞診では悪性所見は認めなかったが、針生検でIDCの診断であった。免疫染色も含めてneuroendocrine carcinomaの診断であった。【手術】乳房切除術及びセンチネルリンパ節生検術を施行した。術中の迅速病理診断ではセンチネルリンパ節には転移陰性であった。【病理学的所見】Invasive ductal carcinoma with a predominately intraductal component, papillotubular carcinoma (Solid papillary carcinoma with invasion)であった。核グレードGrade 2、静脈浸潤やリンパ管浸潤なし、ER陽性、PgR陽性、HER2陰性、Ki67 10.7%であった。【術後経過】ホルモン剤(LET)内服にて経過観察中である。術後2カ月の時点では再発兆候は認めていない。

#### 8. 巨大なmyoid hamartomaの一例 ～一期的乳房形成術～

牧口 貴哉,<sup>1</sup> 堀口 淳,<sup>2</sup> 長岡 りん<sup>2</sup>  
 高他 大輔,<sup>2</sup> 六反田奈和,<sup>2</sup> 佐藤亜矢子<sup>2</sup>  
 時庭 英彰,<sup>2</sup> 内田紗弥香,<sup>2</sup> 常田 祐子<sup>2</sup>  
 横尾 聡,<sup>1</sup> 竹吉 泉<sup>2</sup>  
 (1 群馬大院・医・顎口腔科学)  
 (2 同 臓器病態外科学)

乳腺良性腫瘍においても罹病期間が長期に及ぶ場合や、腫瘍が非常に大きい際には、非可逆的な乳輪乳頭の拡大、皮膚伸展を生じてしまうことがある。その際には腫瘍摘出後に乳房縮小術に準じた修正術が必要である。今回われわれは、非常に稀である巨大なmyoid hamartomaに対して一期的乳房形成術を施行した症例を経験したので報告する。【症例】50歳女性。約7年前に左乳房の増大を自覚したが、経過観察をしていた。徐々に乳房の左右差が著明となったために当院を紹介受診した。左乳房のほぼ全体を占拠する巨大な腫瘍を認め、乳房は高度に巨大化、下垂していた。横軸型切開による乳房縮小術に準じた摘出術、一期的乳房形成術を計画した。腫瘍は境界明瞭な被膜を有しており、周囲との癒着はなく剝離は容易であった。腫瘍摘出により生じたvolume不足を補うために、denudeした尾方皮弁をタッキングすることにより可及的に乳房マウントを作成した。乳輪乳頭は尾方茎として再建し、縫合線はinframammary lineに沿うようにした。術後acceptableな形態は保たれている。病理組織学的診断は稀なmyoid hamartomaであった。

#### 9. 閉塞性黄疸の発症で発見された転移性乳がんの一例

上田 重人, 大崎 昭彦, 松浦 一生  
 重川 崇, 中宮 紀子, 島田 浩子  
 廣川 詠子, 佐野 弘, 高橋 孝郎  
 佐伯 俊昭 (埼玉医科大学国際医療センター  
 乳腺腫瘍科)

【症例】52歳、女性。【主訴】心窩部痛。【現病歴】平成24年11月主訴で受診した際、黄疸を指摘される。当院初診時、眼瞼結膜の黄染と左乳房腫瘍を観察した。CT検査にて肝内胆管から総胆管にかけてびまん性の拡張と下部胆管の閉塞が見られた。GIFとERCPでは十二指腸球部に全周性に隆起と内腔の狭小があったが、総胆管に明らかな腫瘍や結石は観察されなかった。閉塞性黄疸に対し、同部位にステント挿入、ENBDを留置して減黄を行った。乳腺腫瘍は針生検で浸潤性乳管癌(scir, ER-, PR-, HER2 0, Ki67 20%以上)であり、MRIでは左乳房に6.5cm大の皮膚浸潤を伴う不整な腫瘍とリンパ節転移(T4bN1)が認められた。また、十二指腸球部の組織生検では、粘膜上皮に悪性所見は認められず、粘膜固有層に腺癌の転移を疑う所見が認められた。また胆管擦過細胞診は陰性であった。以上より、原発性十二指腸腫瘍のほか、乳がん転移が強く疑われた。【治療経過】H24.12.24 weekly PTX (80mg/m<sup>2</sup>)を開始したところ、6サイクル後のPETで腫瘍FDG取り込み量が著しく減少していた。その後食事摂取が可能となり、H25.2.21退院となった。【まとめ】生検組織の比較と抗がん剤の治療効果により、乳がんの十二指腸転移と確定診断された症例を経験した。

#### 〈セッション3〉

#### 【看護】

座長：佐藤亜矢子 (群馬大院・医・臓器病態外科学)

#### 10. 当病院における乳がんピアサポート活動の取り組みと今後の課題

福島 加代,<sup>1</sup> 真下 陽子,<sup>1</sup> 岡田 朗子<sup>2</sup>  
 平方 智子,<sup>2</sup> 片山 和久<sup>2</sup>  
 (1 伊勢崎市民病院 看護部)  
 (2 同 外科)

当病院では、昨年1月よりボランティアの乳がん体験者(以下：ピアサポーター)によるがん患者の相談(以下：ピアサポート)活動を開始した。開始後一年間の活動状況を報告する。

ピアサポート活動は週2回、相談支援センターに隣接する患者サロンで行われた。一年間の相談件数は481件